

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	キム テウン 金 允恩	所属・職名 文学研究科博士後期課程
e-mail	Taeun.kim67@gmail.com	
発表題名 (英語)	Multiethnic and Multicultural Education and the Possibility of New Communitarity: A Case Study of the <i>Minzoku</i> class at Osaka Municipal Schools	
著者名	KIM, Tae Eun	
会議名 (英語)	AAS(the Association for Asian Studies) Annual Meeting Session 113 (Individual Papers) : Health and Crossing Borders in Modern Japan	
開催地(国、市)	Chicago, Illinois, USA	
参加期間	2009年 3月 26日 ~ 3月 29日	
<p>AAS(the Association for Asian Studies)は、アジアに関する研究に興味をもつ研究者たちを中心に構成されており、アメリカに拠点がある。2009年度年次大会は、3月26日から29日までイリノイ州・シカゴで行われ、2,951人が参加した。AAS年次大会での発表の申請は、チェアやコメントータを含めた5-8人の研究者が共同で発表申請をする場合が多いが、個人レベルで申請をした後、プログラム委員会において類似したテーマの個人発表を一つのセッションに入れてもらう場合もある。報告者が参加したセッション113では、5人の個人申請者が「Health and Crossing Borders in Modern Japan」というテーマの下で、15分間ずつ発表を行った。その後、25分間の質問応答が行われた。このような発表方式は、大会前にチェアから発表者全員にメールが送られ、意見調査を経て決められた。</p> <p><発表内容></p> <p>今回の発表は、日本における多民族・多文化教育実践のあり方を、1990年代に民族学級が新設された大阪市立小中学校の事例を取り上げて検討し、その可能性や課題を探ることを目的として、以下のような内容で行った。まず、民族学級とは何かについて説明し、その歴史的な登場背景やその後の展開について述べた。とりわけ、1990年代において、大阪市の市立小中学校で民族学級が急増したことに注目し、その時期に誕生した大阪市立小学校1校と中学校1校の事例を通じて、民族学級が公立学校の中でどのように取り組まれ、実践されているのか、そのあり方を紹介した。その内容に基づき、民族学級の公立学校における位置づけの変化、そしてマイノリティ側の子どもたちとマジョリティ側との関係の変化が観察されたことから、新しい共同性の構築可能性がうかがえたことを報告の結論とし、本研究の限界や今後の課題などについて述べた。</p> <p><質疑内容></p> <p>発表後の質疑応答では、以下の4点の質問が寄せられた。</p>		

学会発表渡航支援報告書

質問1 韓流ブームが、台湾でもそうですが、日本でも韓国人に対する差別などに影響を与えたと思いますが、どうですか。（台湾の研究者より）

質問2 在日コリアンの中には、宗教的に同じ背景を持つ人が多いと思われそうですが、民族学級に通う子どもたちの背景はどうですか。また、民族学級にはノースコリアンとサウスコリアンの両方が含まれていますか。（日本の南山大学に勤めるコンゴ出身の Roger Munsu Vanzila Assistant Professor より）

質問3 1990年代に民族学級が急増した背景について。Robert J. Pekkanen (University of Washington, セッション113のChair) より

質問4 日本の「多文化共生主義」がマイノリティの民族教育に必ず肯定的に影響を与えたとはいにくいと思いますが、この点について。日本の研究者より

<感想>

英語による学会発表は今回が初めてであったが、自分の論文を英語で発表することで、日本語の文脈においては当たり前と思い、深く検討していなかったところにも気付くことが多く、論文の構成などを考え直すきっかけになった。自分の研究に対して、他の国や社会の研究者たちはどのような点に興味を持つのかについても知ることができた。また、発表を行なったセッション以外のセッションにも参加することで、アジア研究の国際的な動向をうかがうこともでき、今後、研究を進めていくなかでいい参考にしたい。

